

山城高校映画部の興亡

山城4回 福地 純一郎

昭和二十年八月の終戦まで、映画は不良の観るものとされ、戦意昂揚のための国策映画などを学校単位で鑑賞する以外には父兄同伴でなければ観ることはできなかった。京都市内の中学校では教護連盟なる組織がつくられ、先生達は放課後の繁華街をパトロールし、一人で映画館に出入りする生徒を監視していたのだそうである。戦前から大学には「映研」や「映画部」があり、「大学映画連盟」などの組織が存在していたらしいが、当時の中学生にとってはそのような組織は作るべくもなかった。

終戦後、アメリカ映画や欧州映画が続々と公開され、映画が娯楽であると同時に総合芸術であることが再認識されるようになった。子供の頃から映画好きだった中学生達にもやっとおっぱらに映画を鑑賞し、映画を論ずることが出来る時代が到来した訳である。

当時の京都第三中学校にも映画大好き少年が何人か居て、映画研究会を作ろうとしたのは当然の成り行きだったと思われる。

る。早くも二十年十月には戦中、教護連盟の一員として不良取締りに当たっておられた長尾伴七先生を顧問に迎え「京都第三中学校映画研究会」が発足した。京都の中学校では最初だったそうである。部室は運動場北側の木造二階建て校舎（いわゆるとり小屋）の一階東端で、批評紙の発行や映画館の割引券の提供などを行っていた。体育館控室の西側にあった黒板は、その頃から映画評や映画の紹介などに映研やその後の映画部が利用することとなる。

昭和二十三年四月、当時の中学生にとっては驚天動地の六・三制を柱とした学制改革が施行され、新制「京都府立山城高等学校



—山城高校映画部OB同窓会—

Montage

JAN. 2006

Vol. 7

校」が誕生した。又同年十月には通学区区域制が実施され、生徒たちは学校に指示されるまま右往左往させられることとなる。当然、今まで活動していた映研のメンバーも大半が他校へ転校になり、その存続も危うくなるのであるが、そこは良くしたもので、他校で活動していた映研のメンバーが転校してきて、新たに山城高校映画部の誕生となる。顧問には藤木俊一、福田豊子両先生を迎え、部室は南の木造本館西側、階段踊り場の下にベニヤ板で仕切られた一画に移転した。部員が五名も入れば立っていなければ満員になる狭さだったが、そこは和気藹々の映画部員、満員になれば先に居た部員は出て行って譲り合うといった状態が続いた。以後、本館の二階、鉄筋新館の地階などに移転させられることとなる。

映画部の本来の活動は、勿論総合芸術としての映画をあらゆる面から探求し、批判し論ずる事なのだが、それとは別に重要な任務を抱えていた。昭和二十年代半ばといえば、まだテレビも普及せず、庶民の娯楽といえばなんと言っても映画であったことは否めないし、高校生としても例外ではなかった。当時の映画館には学生証提示による割引制度は無く、映画部で作成した割引券に映画館の証印を貰って希望者に配布するのが通例であった。良い映画を選定し、映画館に割引の交渉に行き、割引券を作成し配布するのである。昼休みの映画部々室前は割引券

を買いに来る生徒達が列をなし、部員もその対応に迫られたものである。「映画部に入れば映画が只で見られる」というような噂を信じて入部希望者が殺到したのもこの頃で、入部試験を実施した時期もあった。確かに映画館に交渉に行った後、支配人の「見て帰りや・」の一言で映画が観られたし、当時年に何度かあった「共同観覧」の推薦試写会に招待されたときなどは公欠を買って授業中に堂々と映画を観に行ったものである。

このような状態では本来の部活動が疎かになるのではという懸念もあって、機関紙の発行を企画し、二十五年三月に「Montage」を創刊した。謄写版摺りながら数十頁のもので、部員の論文・エッセイ、先生方の原稿や絵コンテ付のシナリオもあるという、今見ても当時の部員たちの意気込みが伝わってくるような立派な機関誌であった。その後、機関誌も機関紙に変わり数年で廃刊の運命をたどることとなる。

昭和三十年代前半以降、テレビの普及により映画館も閑古鳥が鳴くようになり、映画産業も斜陽化する。映画会社は恥も外聞も無くロマンポルノやピンク映画の製作に力を入れ始める。どうやらこのあたりで残念ながら我等の映画部も消滅してしまっただけだ。

さて、それから約半世紀も経った平成十一年、嘗ての映画部メンバーが集まって山城高校映画部OB同窓会を立ち上げた。



京三中（昭和二十三年卒）より山城高校第九回（昭和三十二年卒）まで五十九名の元部員の所在が判明、その内集まったメンバーは二十二名、若い頃観た映画の想い出、映画館との交渉の苦労話等々話題は尽きなかった。以後同窓会は隔年に開催され、機関誌「Montage」もこれを機に復刊した。どうせ二、三号で廃刊だろう？ などといわれたが、内容もますます充実し、今年（平成十七年一月）には第六号を配布するまでに至っている。平成十四年にはインターネット上にホームページも開設した。若い頃観た所謂クラシック・ムービーは部員以外の同窓生にと

っても共通の話題になるものとみえ、ホームページへの訪問者や協力者も増え、今では貴重品となった古い資料を提供して貰ったり、ご意見や感想を頂いたりで大変賑やかなページになっている。

近年、映画も映画館も様変わりし、昔とはまた違ったブームになっているようだ。嘗て映画を通じて知り合った仲間と再び映画を語れることは何より

1950～1960年頃の 洋画美女TOP10

(山4卒業生にのインターネット投票による人気投票の結果です)

1. イングリッド・バーグマン
2. オードリー・ヘップバーン
3. モーリン・オハラ
4. マリリン・モンロー
5. ブリジッド・バルドー
6. シルバーナ・マンガーノ
7. ジョーン・フォンテイン
8. ヴィヴィアン・リー
9. デボラ・カー
10. ソフィア・ローレン

尚、京三中時代の映研
誕生については平成十四
年刊「Montage 第三号」
水野悟氏の記事を参考に
させていただいた。

の幸せであり、新築成つた母校にも再び映画部が復活する事を切望して止まず、又その晩にOB一同微力ながら応援するに各かでないのは勿論のことである。



イングリッド・バーグマン